

# 長期入院していた統合失調症患者が経験する地域生活上の困難さ - 訪問看護ステーションの看護師の語りからの分析 -

著者	小嶋 友美
発行年	2017-03-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10422/00012283">http://hdl.handle.net/10422/00012283</a>

氏 名 小嶋 友美

学 位 の 種 類 修士（看護学）

学 位 記 番 号 修士第220号

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第3条第1項

学 位 授 与 年 月 日 平成29年 3月10日

学 位 論 文 題 目 長期入院していた統合失調症患者が経験する地域生活上の困難さー訪問看護ステーションの看護師の語りからの分析ー

審 査 委 員 主査 教授 宮松 直美

副査 講師 森本 明子

副査 講師 興水 めぐみ

## 論文内容要旨

※整理番号	225	(ふりがな) 氏 名	こじま ともみ 小嶋 友美
修士論文題目	長期入院していた統合失調症患者が経験する地域生活上の困難さ -訪問看護ステーションの看護師の語りからの分析-		
<p>&lt;研究目的・意義&gt; 長期入院統合失調症患者が地域生活においてどのような困難な経験をしていたのかを、訪問看護師の視点から明らかにすることにより、長期入院統合失調症患者が家庭を中心とした地域生活に移行できるように、必要な準備や支援を見出すための示唆を得る。</p> <p>&lt;研究方法&gt; 本研究は、帰納的アプローチによる質的記述的研究である。統合失調症患者への訪問看護師経験を5年以上持ち、長期入院していた統合失調症患者への訪問看護経験を持つ訪問看護師11名を対象とした。研究参加者より各1名の長期入院統合失調症患者の地域生活における困難な経験について聞き取りを行い、分析を行った。</p> <p>&lt;結果&gt; 分析の結果123のコードより、41個のサブカテゴリーと、【統合失調症の症状と治療に翻弄された日常生活】【調整困難な日常生活行動】【安らげない家庭生活】【思い通りにいかない社会活動】【地域社会からの孤立】【自己の存在価値を模索】【見通しのつかない将来】の7つのカテゴリーを抽出した。</p> <p>&lt;考察&gt; 長期入院統合失調症患者は地域生活において、家庭と地域社会の2つの場所で【統合失調症の症状と治療に翻弄された日常生活】を経験していた。家庭では、長期入院による影響や統合失調症という病の影響から【調整困難な日常生活行動】により家庭生活を営んでいた。また、家族と過ごす際に居心地の悪い思いをすることもあり、【安らげない家庭生活】を経験していた。地域社会ではデイケア、作業所等の通所サービス等を利用し、経済活動や居場所作りを行っていた。しかし、負担に耐えて作業をしても報酬は少なく、【思い通りにいかない社会活動】を経験し地域社会と距離を置くようになる。さらに、支援者を頼ろうにも《支援者から納得のいかない対応を受ける》ことで、【地域社会からの孤立】を経験していた。家庭にいても安らげず、地域社会からも孤立しており長期入院統合失調症患者の苦しみは地域生活のあらゆる場所に存在していた。さらに、長期間の入院生活からようやく開放されたにも関わらず、家庭内と地域社会で《周りから病者としての扱いを受ける》ことによって、【自己の存在価値を模索】していた。過去の辛い入院経験からいつ地域生活を奪われるかもしれない不安を抱き、《再入院を恐れながら家で過ごす》中で、親と自分の老化という発達課題上の危機に遭遇し、【見通しのつかない将来】に大きな影響を与えていると考える。</p> <p>&lt;総括&gt; 長期入院統合失調症患者の地域生活は7つの困難な経験が重なり合うことで、苦しみを深めていた。しかし、「病状管理できること」「日常生活行動を調整できること」「家族や自分とうまく付き合うことができること」「思うように社会活動ができること」「地域社会に居場所ができること」のどれか1つでも長期入院統合失調症患者の苦しい経験を支援することができれば、家庭生活を送ることは今よりは容易になるのではないだろうか。そのためには、長期入院統合失調症患者が自らの症状や副作用を医療者に伝える経験を繰り返し、自らの手で病状に対処する方法を獲得していけるよう支援が必要であると考えます。</p>			